

博士論文要旨

〈うたの町〉をめぐる近代の空間誌 ——おわら風の盆の半世紀に耳を澄ます——

長尾 洋子

今日、「民謡」は「定まった歌詞と旋律を持つ、特定の地域を代表する伝統的な歌」（武田 2007:407）と一般に理解されている。しかし、1980年代末以降に活発化した批判的研究は、そうした理解がナショナリズム運動の中で生み出され、メディアの発達と結びついた音楽産業の進展とともに内実化し、学問分野の成立に深く関わり、観光の大衆化や地域振興などと連動して成立したことを明らかにしてきた。これらは近代にまつわる問題である。

近代は長く時間的概念として捉えられてきた。しかし、近代が自明のうちに前提としていた空間（性）はメディア・テクノロジーの進展やグローバリゼーションの加速化によって解体が進み、西欧近代を基準とした単一の時間観が相対化され、近代は場所によって異なる意味や過程を呈し、「それらの相互の節合として初めて語られうる空間的な過程」（吉見 2003:157）とする見方が広範に受け入れられつつある。近代を空間的に捉え直す作業は、文化やアイデンティティの単位や固有性を暗黙裡に画定していた境界、そうした境界を想定するような思考様式をも揺るがした。しかしながら、近代の重要な産物のひとつである「民謡」について、空間的な再検討はほとんど行われてこなかった。

本研究は以上のような問題意識の下、「民謡」とそれをめぐる表現、文化、空間がおもに 20 世紀前半の日本という文脈—さまざまな要素や力の流れが複雑な関係を織りなす環境—のなかでどのような展開をみせたかを探る試みである。より具体的には、越中おわら節（以下おわら）の歌詞に詠われた〈うたの町〉を視座に据え、近代の時空間がどのように生成、再編成されたかを描き出す。

序論では〈うたの町〉がおわらの本場とされる富山市八尾町のみならず、「民謡」の近代にとって象徴的な意味を担うことを示し、視座としての有効性を述べる。また国文学、民俗学、地理学における先行研究を吟味し、「民謡」を含むうたの空間誌の可能性について検討する。

第 1 章は政府がはじめて編纂した民謡集『俚謡集』（1914 年）の成立過程をたどることにより、〈うたの町〉が明確な像を結ぶ以前の歴史において、どのような空間の秩序化が目論まれていたかを探る。『俚謡集』はそれまでの民謡集とは制度的背景や調査プロセスが異なっており、うたの序列化と空間的再配置を引き起こす重大な意義を有していた。この章では国民国家形成へと向かわせる政策がどのような回路を伝って各地の生活の場、うたや踊りの場と交渉しはじめたのかを描き、いずれは〈うたの町〉を生じさせることになる言語空間、やわらかな統制が促した空間編成の一端を明らかにする。

第 2 章が焦点をあてるのは 1913 年に開催された富山県主催一府八県連合共進会である。共進会のモデルとなる博覧会は近代を象徴する文化装置であり、人びとは博覧会を巡回することで身体的に、また観覧することで視覚的に、世界についての認識と想像力を獲得する。富山県を代表する演目のひとつとして演じられたおわらの舞台は八尾町民に刺戟を与え、自らの創意による踊りの振付につながった。ここでは後に地域社会を単位として伝承されるようになる踊りの誕生とその身体性、博覧会的空間が体現した近代とがどのような関係をもっていったかを検討する。

第3章ははじめて「民謡」の語を冠して開かれた演奏会「全国民謡大会」をとりあげ、「民謡」の位置づけの変化および演唱空間の拡大過程を跡づける。主催者後藤桃水は宮城から上京し、東京を拠点に各地のうたの認知向上と演奏会場、演奏機会の確保に奔走した。八尾町のおわらは全国民謡大会に出演することで東京に進出し、いわば「全国区デビュー」をはたした。国家の政策とは異なる次元で展開された「民謡」普及活動の意義を空間の視点から問うとともに、各地のうたと〈中央〉との関係を民衆レベルで浮かび上がらせる。

第4章は近代詩運動をとりあげる。大正期に興隆した近代詩運動は文学の領域にとどまらず、地域の文化や〈中央〉と〈地方〉の関係、表象のあり方にまで影響を及ぼした。富山県では日本海詩人連盟が発足し、機関誌『日本海詩人』は県下の詩人にとって重要な発表と交流の場となった。近世以来親しまれていたおわらは近代詩運動に接触したことによって純朴さや平明な表現を重視するようになる。この章では近代詩運動との接触によって生じたおわらの変化を探り、どのような地方性が現出するに至ったかを明らかにする。

第5章は昭和初期において八尾町のおわらに新たに踊りが振付けられた過程を精査し、それが郷土芸術の探求の一環として行われたこと、そして空間のジェンダー的再編成をともなっていたことを明らかにする。〈新踊〉とよばれるこの振付は1929年日本橋三越での富山県物産陳列会の余興出演のために案出され、八尾町のおわらにおける「見せる」身体性への移行を劇的に推し進めた。性別によって二種の踊りが創られ、踊りの主体、表象、それらの価値づけに関する問題は青年団、農村娯楽、花柳文化、童謡舞踊といった領域に及んだ。

第六章では、1929年に発足した越中八尾民謡おわら保存会（以下、おわら保存会）が〈うたの町〉の輪郭を一気に鮮明にしていく様相を描く。歌詞募集事業をはじめとして、おわら保存会は多彩なイメージ創出と空間演出を展開する。その際、何が構想され、実現され、あるいは挫けたのか。ルフェーブールのいうところの空間的实践として〈うたの町〉の形成を描く。

第7章はアジア太平洋戦争下のおわらが主題である。おわらと戦争との関係について今日話題にのぼることはない。しかし、おわらをめぐる近代の経験としてふれないわけにはいかない。なぜなら、総力戦体制に向かう過程、その体制下における経験は、国民生活のあらゆる面において合理化が目指された近代化の重要な局面を構成していたからである。この章では、慰問歌詞の創作からはじまった戦争との関わりがどのように展開したかを、〈うたの町〉と〈中央〉文壇との関係、翼賛体制の動向などと関連付けて論じる。

〈うたの町〉をめぐる近代の空間誌は、20世紀前半の日本という文脈においてうたがくぐりぬけた次の4つの過程を浮かび上がらせた。①統治と権力の問題にまつわる過程、②身体にまつわる過程、③資本主義の深化（消費社会の形成と拡大）にかかわる過程、④地理的想像力とその物質性にかかわる過程である。そこには人間の相互行為の舞台装置として空間を利用する実践が、ひるがえってその空間としての文脈性を規定する作用がはたらいており、不断の再文脈化が起こっていた。〈うたの町〉をめぐる近代とは、変形しながら反復される統制、生き延びるための本能とも技巧を要する戦術ともつかない実践、これらに絡みつく身体性、美学、資本主義、地理的想像力、物質性が再文脈化を通じて響き合う時空間なのであった。

引用文献

武田俊輔『「民謡」の再編成』、徳丸吉彦、高橋悠治、北中正和、渡辺裕編『事典 世界音楽の本』岩波書店、2007年

吉見俊哉『カルチュラル・ターン、文化の政治学へ』人文書院、2003年